

#### 14) 口腔細菌学実習におけるレポート作成 チェックシートの導入の試み

○杉山 明子, 玉井利代子, 菅又 美穂, 清浦 有祐  
(奥羽大・歯・口腔病態解析制御)

口腔細菌学では第3学年後期に口腔細菌学実習を行っている。時間数は週1回、各回3時間で15回である。実習毎に学生に実習レポートを提出させ、評価の対象にしている。実習レポート作成については第1回の実習で詳しく説明を行っているが、レポートの形式、記述内容には不十分な点が認められた。そこで、レポートを分析し、問題点の抽出を行った。抽出された問題点は以下の5項目であった。

- (1) 目的が充分書かれていないものがある。
- (2) 実習項目の一部が抜けているものがある。
- (3) 結果の表現が適切でないものがある。
- (4) 結果に沿った考察ができていないものがある。
- (5) 引用した参考文献の記載がないものがある。

これらの問題点を解決するために次のことが考えられた。

- 1) 学生は実習内容を理解し、レポートを書くことを要求されるが、その訓練ができていない。
- 2) 実習書は実習を行う手技について詳しく書かれているが、学生がレポートを書く際には実習書を補うものが必要である。

そこで、実習レポートに記載すべき項目を学生自身が確認できるレポート作成チェックシートを導入し、実習書に付け加えた。チェックシートには実習毎に実習内容に沿ってレポートに書くべきことをチェック欄を設けて記載した。学生はレポート提出前にチェックシートにチェックすることで記載の確認ができる。チェックシートはレポートに添付して提出させた。

第1回実習から第4回実習までの提出されたレポートを分析したところ、チェックシートの導入により、レポートの問題点が解決した項目があったが解決しないものもあった。問題点が解決されなかった項目についてはチェックシートのチェック項目をより具体的に改良を行うことで解決されるのではないかと考えられる。

#### 15) 歯科治療中のペースメーカー誤作動を疑った1例

○三科祐美子, 宮島 久, 岡崎 敦子, 吉開 義弘  
竹内 聡史, 御代田 駿, 近藤 祐, 高島 佑介  
宮嶋 千秋

(会津中央病院・歯科口腔外科)

【緒言】ペースメーカーは、主に洞不全症候群や房室ブロックなどに対して、正常な心機能を得る目的で使用されている。最近では、心房細動の予防に対しても応用されるようになった。今回演者らは、ペースメーカー装着患者に対しエアタービンにて切削している際、頰脈を来たし、ペースメーカーの誤作動を疑った1例を経験したので、その概要を報告した。

【症例】80歳男性。左側上顎前歯部歯肉腫脹を主訴に来院。現病歴：初診前日より左側上顎前歯部歯肉に腫脹疼痛出現。近医受診したところ、左側上顎前歯部顎炎と診断され当科紹介。既往歴：洞不全症候群、心房細動に対し5年前にペースメーカー植え込み。高血圧、C型肝炎、認知症。内服薬：Ca拮抗薬、β遮断薬、利尿薬などの降圧薬、抗不整脈薬、抗血小板薬、肝機能改善薬。現症：体温36.8℃、全身倦怠感あり。口腔外所見：上唇に圧痛を伴う腫脹および左側鼻閉感。口腔内所見：左側上顎前歯部の歯肉頬移行部～上唇に渡る腫脹・発赤・圧痛および原因歯根尖部周囲に膿瘍形成。診断：左上12急性根尖性歯周炎、左側上顎前歯部顎炎。処置および経過：入院の上、抗生剤点滴による消炎。抗血栓剤の内服があったため、消炎術は施行せず。消炎後抜歯。抜歯時の経過：2%キシロカインカートリッジにて局所麻酔。エアタービンにて連結冠を切断中、心電図上、心拍数が60/minから100/minに変化。循環器科、臨床工学士コンサルトし、ペースメーカーチェック。設定を変更し、心拍数と心電図波形が抜歯前の状態に戻ったため、原因歯抜歯。抜歯後、ペースメーカー再評価し、問題なかったため、最初の設定に戻し、モニター管理。その後の異常は無し。

【考察】最近のペースメーカーには心房細動を抑制する機能が搭載されており、症例毎に設定できる。この機能は、早期の自己脈や心房性期外収縮を感知すると、心房興奮が出現しなくなるまで

心拍数を徐々に上昇させ、心房興奮が感知されない状態が続くと、心拍数を下限心拍数までゆっくり低下させていく。洞不全症候群によりペースメーカーが植え込まれた症例では、心房性期外収縮などが引き金となって、発作性心房細動が発症する可能性が高く、この機能が設定されていることが多い。本症例では、この機能が働いたと考えられるが、原因として、心房性期外収縮が起きた可能性、電磁障害、または何かしらのノイズをセンシングした可能性が挙げられるが、心電図上では不整脈等の確認ができず、ペースメーカーの履歴にも残っていなかったため、原因の特定には至らなかった。

【まとめ】今回は、原因の特定に至らなかったが、今後、このようなことが起こりうることを念頭に、起こった場合は、その後に履歴を確認するなど、その原因について検討し、症例を蓄積することが重要であると考えます。